

五 反 廃 寺

1997年3月
久世町教育委員会

序

私達の町久世町は、山陰と山陽を結ぶ結節点に位置し、古くから人々の生活の舞台として栄え、数多くの遺跡が残されています。中でも五反廃寺はその出土瓦などから、各方面で注目されているところです。

近年、本町でも中国横断自動車道や県北流通センターの建設など地域の変化が顕著なっており、その波は五反廃寺の周辺にも及ぶ状況となっております。このため、宅地造成や道路拡幅工事に先立ち五反廃寺の寺域を確定し、その保存を図ることが急務であると感じ、このたびの調査を実施いたしました。幸いにも、主要建物の掘り込み地業を始め多大な成果を得ることができ、当初の目的をほぼ達成いたしました。

このたびの調査は、五反廃寺の保存のための第一歩となるもので、関係各位には大変お世話になりました。ご協力を賜りました調査指導委員の皆様を始め地元の方々には、心より感謝申しあげます。

平成9年3月31日

久世町教育委員会

教育長 山田重和

例　　言

1. 本書は、久世町教育委員会が発掘調査を実施した五反廃寺の発掘調査報告書である。
 1. 五反廃寺は岡山県真庭郡久世町大字三崎に所在する。
 1. 発掘調査は久世町教育委員会が主体となり、平成4年度から平成8年度までの国庫補助事業として実施した。
 1. 発掘調査及び報告書の作成において、五反廃寺発掘調査指導委員会を設け、委員各位から終始有益な指導・助言をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。
 1. 本書で使用した座標は、国土法に基づく第V座標系である。
 1. 本書に使用したアルファベット記号は、SB—建物 SC—柱列 SD—溝 SH—堅穴住居である。
 1. 土層断面図等で使用した土色は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修)による。
 1. 発掘調査及び報告書の作成は、久世町教育委員会生涯学習課主任池上博が行った。
 1. 出土遺物・図面・写真類は久世町教育委員会(久世町大字久世2932-5)に保管している。

本文目次

| | |
|------------------|----|
| I. 位置と環境 | 1 |
| 1. 地理的環境 | 1 |
| 2. 歴史的環境 | 1 |
| II. 調査の経過 | 4 |
| 1. 既往の調査 | 4 |
| 2. 調査に至る経過 | 4 |
| 3. 調査の経過 | 6 |
| III. 検出遺構 | 9 |
| 1. 溝 | 9 |
| 2. 建物 | 10 |
| 3. その他の遺構 | 12 |
| IV. 出土遺物 | 15 |
| 1. 軒丸瓦 | 15 |
| 2. 丸瓦 | 17 |
| 3. 軒平瓦 | 20 |
| 4. 平瓦 | 23 |
| 5. 鳥尾 | 23 |
| 6. 線刻瓦 | 26 |
| V. まとめ | 27 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------------|----|----------------------------|----|
| 第1図 久世町位置図 | 1 | 第12図 T 4 S D 3、S D 4 | 14 |
| 第2図 五反庵寺周辺遺跡分布図 | 2 | 第13図 軒丸瓦拓影・実測図(1) | 16 |
| 第3図 五反庵寺周辺切継図(字名分布図) | 7 | 第14図 軒丸瓦拓影・実測図(2) | 18 |
| 第4図 発掘調査図 | 8 | 第15図 軒丸瓦拓影・実測図(3) | 19 |
| 第5図 T 3—S D 1 | 9 | 第16図 丸瓦拓影・実測図(1) | 20 |
| 第6図 T 15—S D 1 | 10 | 第17図 丸瓦拓影・実測図(2) | 21 |
| 第7図 T 22—S B 1 | 11 | 第18図 軒平瓦拓影・実測図 | 22 |
| 第8図 T 12—S H 1 | 12 | 第19図 平瓦拓影・実測図(1) | 24 |
| 第9図 T 16—S H 1 | 12 | 第20図 平瓦拓影・実測図(2) | 25 |
| 第10図 T 4—S D 3出土遺物 | 12 | 第21図 鳥尾、線刻瓦拓影・実測図 | 26 |
| 第11図 T 9—S C 1 | 13 | 第22図 五反庵寺出土軒瓦 | 28 |

図版目次

| | | | |
|------|--------------------------|-------|-----------|
| 図版 1 | 1 久世町全景(南から、航空撮影) | 図版 8 | 1 軒丸瓦ⅠA型式 |
| | 2 五反廻寺周辺(東から、航空撮影) | | 2 軒丸瓦ⅠB型式 |
| 図版 2 | 1 T 3 (南から) | | 3 軒丸瓦ⅠB型式 |
| | 2 T 3—S D 1 (北から) | 図版 9 | 1 軒丸瓦Ⅴ型式 |
| 図版 3 | 1 T 15 (西から) | | 2 軒丸瓦Ⅴ型式 |
| | 2 T 15—S D 1 (西から) | | 3 軒丸瓦Ⅳ型式 |
| 図版 4 | 1 T 22 (南から) | 図版 10 | 1 軒丸瓦Ⅵ型式 |
| | 2 T 22—S B 1 (南から) | | 2 軒丸瓦Ⅵ型式 |
| 図版 5 | 1 T 22—S B 1 土層断面図(北西から) | 図版 11 | 丸瓦 |
| | 2 T 11—S B 1 土層断面図(北西から) | 図版 12 | 1 軒平瓦Ⅱ型式 |
| | | | 2 軒平瓦Ⅱ型式 |
| 図版 6 | 1 T 12—S H 1 (北から) | 図版 13 | 3 平瓦 |
| | 2 T 16—S H 1 (南から) | 図版 14 | 1 鳥尾 |
| 図版 7 | 1 T 9 (西から) | | 2 線刻瓦 |
| | 2 T 4—S D 3、S D 4 (東から) | | 3 土師器 |

I. 位置と環境

1. 地理的環境

岡山県真庭郡久世町は、岡山県のはば中央を南流する旭川の上流域に位置する人口1万2千人余の山間部の町である。昭和30年、旧久世町と美和村の合併により現在の町域が確定した。面積は75.12km²で、81%が山林である。気候は比較的温暖で台風や地震等の自然災害はほとんどない。

地形的には、旭川とその支流である目木川が形成した沖積平野を中心、北は中国山地、南は吉備高原の一部が域内に含まれる。北部の中国山地は高く急峻で、町内最高所である三坂山の903mを筆頭に、摺鉢山で879mに達し、その南面は多くの深い谷に解析されている。急峻な山地の麓には、比較的なだらかな山地ないしは丘陵が横たわり、沖積平野との境をなしている。一方、沖積平野は極めて平坦となっており、久世町の中心地として農地はもとより商工業用地としての利用が増加している。

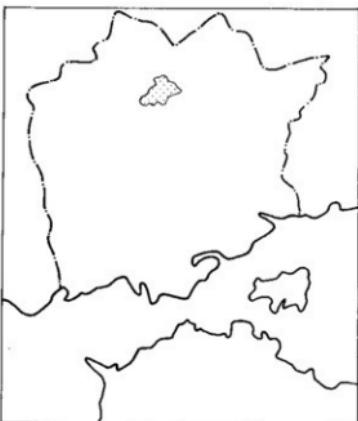
現在の市街地の形成は、中世末期に遡ると考えられ、この地域の商業の中心地として栄えていたといわれる。更に、中世に大炊寮領となっていた久世保（註1）でも、既に公用錢の進納等から領内における経済活動の発展が窺われる（註2）。こうした、商業・流通活動の拠点としての地域的特質は、江戸期に於いても高瀬舟の発着地として、また牛馬市の隆盛と相まってますます商人の定住化が進み、今日の久世町=商業の町としての基礎が形づくられていった。

近年、相次ぐ大型ショッピングセンターの進出や岡山県による県北流通センターの立地など、商工業を巡る大きな変化がみられる。

2. 歴史的環境

久世町に於ける人間による營為の痕跡は、縄文時代に遡る。町内最古の遺物としては、楕円の押型文土器が大旦遺跡（註3）、上野遺跡（註4）で出土しており、早期に位置づけられる。なお、上野遺跡では、その後も断続的な生活の痕跡が認められている。それ以外では、目木川流域の江森遺跡（註5）で中期の土器が、旭川の支流である三坂川（小谷川）流域の宮芝遺跡（註6）や三栄神社裏山遺跡（註8）で後期の土器が、目木川流域の五反遺跡（註9）で晩期の土器がそれぞれ出土しているが量的に少なく、縄文期に於けるこの地域のキャンプサイト的な集落のあり方を示している。

弥生時代になると、五反遺跡で前期後半の土器が出土しており、町内最古の弥生集落として注目される。その後、中期から後期になると集落の数が著しく増加する。大旦遺跡や岡山県教育委員会が県北流通センター建設に先立ち発掘調査を実施している旦山遺跡など平野部周辺に大規模な拠点的集落



第1図 久世町位置図



第2図 五反庵寺周辺遺跡分布図 (1/15,000)

- | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|
| 1. 五反庵寺 | 8. 多田古墳群 | 15. 西口遺跡 | 22. 且山遺跡 |
| 2. 五反遺跡 | 9. 新池古墳群 | 16. 上ノ山遺跡 | 23. 野辺張遺跡 |
| 3. 岡松遺跡 | 10. 細シ遺跡 | 17. 引屋敷遺跡 | 24. 惣台遺跡 |
| 4. 大旦遺跡 | 11. 多田須遺跡 | 18. 経塚 | 25. 先日山遺跡 |
| 5. 金屋古墳群 | 12. 上達遺跡 | 19. 木谷古墳群 | 26. 三崎古墳群 |
| 6. 長光寺古墳群 | 13. 戸坂遺跡 | 20. 木谷遺跡 | 27. 笹向城 |
| 7. 蛇ノ尾古墳群 | 14. 戸坂古墳群 | 21. 宮ノ丸古墳群 | 28. 奥田古墳 |

が形成される一方、山間部の中小平野を望む丘陵上などにも小規模な集落が成立する。

古墳時代になると、一般に農業生産性の向上を背景にして首長が出現するが、町内に於いては現在までのところ初現期の古墳、ないしはそれに先行する弥生墳丘墓は未確認である。また、前期の大型の前方後円（方）墳も認められず、わずかに全長24mの前方後方墳である宮ノ丸1号墳（註9）や全長約28mの前方後円墳であるアタゴ山5号墳（註10）などが知られているのみである。5世紀中頃になると、久世町域でも造墓活動が活発となり中原古墳群（註11）や羽庭古墳群（註12）などの古式の群集墳が形成される。いずれも低平な墳丘を有する方墳や円墳で構成され、前時代の墓制の伝統が色濃く認められる。さらに後期になると、町内各所に群集墳が形成されるようになる。大正期に発掘された富尾古墳群中の丸山12号墳（小倉見古墳）からは環頭柄頭が出土しており注目される（註13）。

白鳳期に入ると、この地にも仏教文化が盛行するようになり、五反庵寺が造営される。出土した軒丸瓦の意匠から、高句麗との関連性が指摘されており注目される（註14）。また、五反庵寺東方平野部には、条里制遺構（目木条里）が遺存しており、五反庵寺との関連が想定されるものの、発掘調査では鎌倉期までしか遡ることができず、今後の研究が待たれるところである（註15）。なお、目木条里的北側の山裾に位置する西口A遺跡では、10数点の墨書き器とともに陶製円面鏡や獸足壺の脚部が出土しており、何らかの公的施設の可能性がある（註16）。

註

- （註1）中野栄夫「美作国久世保」『岡山県史研究 創刊号』岡山県史編纂室 1981年
- （註2）「壬生家文書」「図書寮叢刊』永享七年（1435年）十二月十九日付恒屋直清書状に「久世保御公用拾貰文到来候、則以商人進納申候」とある。
- （註3）松本和男「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告57』岡山県教育委員会 1984年
- （註4）山磨康平・池上 博「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91』岡山県教育委員会 1994年
- （註5）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』久世町史編集委員会 1975年
- （註6）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』久世町史編集委員会 1975年
- （註7）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』久世町史編集委員会 1975年
- （註8）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』久世町史編集委員会 1975年
- （註9）池上 博『久世町埋蔵文化財分布地図』久世町教育委員会 1989年
- （註10）池上 博『久世町埋蔵文化財分布地図』久世町教育委員会 1989年
- （註11）福田正繼・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』岡山県教育委員会 1995年
- （註12）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』久世町史編集委員会 1975年
- （註13）本村豪章「古墳時代の基礎的研究稿一資料(1)ー」『東京国立博物館紀要第16号』東京国立博物館 1980年
- （註14）三好基之「律令時代」『津山市史 第1巻 原始・古代』津山市 1972年
- （註15）松本和男「目木条里」『岡山県埋蔵文化財調査報告12』岡山県教育委員会 1982年
- （註16）1985年に久世町教育委員会によって遺物が採取された。遺物の内容から見て、何らかの公的施設であろう。あえていえば、大庭郡衙の可能性を指摘できる。

Ⅱ. 調査の経過

1. 既往の調査

久世町の市街地の東方に、南北に長く伸びる丘陵がある。五反庵寺はこの丘陵先端部に位置している。1926年（大正15年）に永山卯三郎によって大庭寺址として紹介（註1）されるまでは、日本書紀にいう白猪屯倉の遺址として周辺住民には認識されていた。永山は畑の耕作等によって出土する瓦類や礎石から当該遺跡が白猪屯倉の時代のものではなく後の時代の寺院址であることを指摘するとともに、南北2町、東西1町の寺域を想定した。その後、出土した軒丸瓦の一部が高句麗の影響下に成立したものとの指摘（註2）があり注目をされた。しかし、五反庵寺の学術的発掘調査の必要性は誰しもが認めながらも実現せず、散発的に瓦についての見解が示される程度であった（註3）。

1978（昭和53年）久世町によって寺域の中心部分と想定される地域を南北に横切る集落道の拡幅工事が計画され、工事に先立ち、岡山県教育委員会によって初めて発掘調査が実施された（註4）。この発掘調査は道路の拡幅部分という限定された範囲での発掘調査であったため、主要建物に関する知見は得られなかったが、柱穴や瓦溜まりが検出されその後の調査に期待をいたしかせた。

2. 調査に至る経過

近年、市街地の拡大に伴いこの丘陵にも都市化の波が押し寄せるようになり、五反庵寺の保護・保存のためになんらかの対策をたてる必要に迫られてきた。こうしたことから、平成4年度から平成8年度までの5ヶ年計画で寺域範囲と主要伽藍の概要を把握するために、久世町教育委員会が国庫補助を得て、発掘調査を実施することとなった。調査は5ヶ年計画で実施した。平成4年度は地形測量を、平成5年度より平成7年度にかけて3カ年にわたり発掘調査を実施した。本年度は遺物整理と報告書の作成を行った。なお、調査にあたって発掘調査指導委員会を設置した。調査体制と発掘調査指導委員会規約は下記のとおりである。

調査主体

久世町教育委員会

発掘調査指導委員会

委員長 山田 重和 久世町教育委員会

副委員長 船津 昭雄 久世町文化財保護審議会副会長

委 員 白井 洋輔 岡山県教育委員会文化課課長代理

狩野 久 岡山大学文学部教授

亀田 修一 岡山理科大学助教授

河本 清 岡山県古代吉備文化財センター所長

葛原 克人 岡山県教育委員会文化課参事

近藤 義郎 岡山大学名誉教授

高畠 知功 岡山県教育委員会文化課課長補佐（平成7年度まで）

平井 勝 岡山県教育委員会文化課課長補佐（平成8年度から）

| | |
|----------|------------------------------|
| 菱川 克士 | 久世町文化財保護審議会会長 |
| 松本 和男 | 岡山県古代吉備文化財センター調査第三課課長 |
| 湊 哲夫 | 津山郷土博物館館長 |
| 調査員 池上 博 | 久世町教育委員会生涯学習課主任 |
| 事務局 灰原 稔 | 久世町教育委員会社会教育課課長（平成4年度） |
| 保田 寛治 | 久世町教育委員会社会教育課課長（平成5年度～平成7年度） |
| 笹井 洋太 | 久世町教育委員会生涯学習課課長（平成8年度から） |
| 池田 寛治 | 久世町教育委員会社会教育課主幹（平成4年度） |
| 仁枝 章 | 久世町教育委員会社会教育課参事（平成5年度～平成7年度） |
| 新見 圏作 | 久世町教育委員会生涯学習課課長補佐（平成8年度から） |

発掘調査協力者

矢谷 勝彦、矢谷 茂雄、矢谷 次郎、矢谷 和夫、豆原 正、豆原 綾子、孝井 照子、矢谷 房治、船津 英子、松尾 俊彦、實村恵美子、植元美智子、森 俊弘（順不同、敬称略）

五反廃寺発掘調査指導委員会規約

（設 置）

第1条 岡山県真庭郡久世町大字三崎623番地先の地内で五反廃寺発掘調査を実施するため五反廃寺発掘調査指導委員会（以下「委員会」という）を設置する。

（目 的）

第2条 委員会は、岡山県真庭郡久世町大字三崎623番地先の地内での発掘調査及び調査成果の活用に関し、指導を行うことを目的とする。

（事 業）

第3条 委員会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

(1) 岡山県真庭郡久世町大字三崎623番地先の地内に所在する五反廃寺の発掘調査指導に関するこ^と。

(2) その他、この目的を達成するために必要な事業。

（組 織）

第4条 委員会は、学識経験者と行政関係者で構成し、委員長、副委員長を置く。

2 委員長は、久世町教育委員会教育長をもって充てるものとする。

3 委員長は、副委員長を任命する。

4 委員長は、委員会を代表し会務を掌握する。

（任 期）

第5条 委員長及び委員の任期は、調査を完了するまでとする。

（会 議）

第6条 委員会は、必要に応じ隨時委員長が招集する。

（事務局）

第7条 委員会の事務を処理するため、久世町教育委員会に事務局を置く。

(補則)

第8条 この会則に定めるもののほか、委員会の運営に関して必要な事項は委員会が定める。

附則 この会則は平成5年9月1日から施行する。

3. 調査の経過

調査にあたって、地元での聞き取り調査を行うとともに、字名を参考にしながら調査計画をたてた。その結果、「観音堂」と呼ばれる字名の残る墓地を講堂に比定し、現在周囲より一段高くなっている大師堂と墓地のある高まりを金堂に比定した。また、「イボ水」と呼ばれる字名の残る地域にある「くま」と呼ばれる僅かな高まりの1つを塔に、1つを中門（山門）に比定した。これは、法起寺式の伽藍配置を想定したものであった。

平成5年度は、主に寺域北端部と字「観音堂」周辺に幅3mのトレンチを設定した。その結果、T3南端で中心寺域の北端を画し、ほぼ東西方向に延びる溝（T3-S D1）を検出した。そこでT3の西側に2ヶ所のトレンチ（T6、T7）を設定したところ、T6でこの溝に続きを検出することができた。またT4では中世の溝（T4-S D3）を検出した。溝内には多量の瓦が遺棄されていた。その他T4でいくらかの土壌を検出しが、時期や性格は不明であった。

平成6年度は、前年に引き続き字「観音堂」周辺にT8、T9を設定し主要建物の検出に努めたが十分な成果が得られなかった。また、金堂推定地周辺にもT10～T12を設定したところT11で主要建物の掘り込み地業を検出した。T15～T18は塔推定地の「くま」周辺に設定したトレンチであるが、周辺の削平が著しく塔に関係する遺構を検出することはできなかった。ただT15で中心寺域の東端を画し、ほぼ南北に延びる溝（T15-S D1）を検出した。しかし、この溝の続きをT20では削平が著しく検出できなかった。

平成7年度は、前年に検出した主要建物の下層基壇の規模を把握するために3ヶ所のトレンチ（T22、T23、T28）を設定した。その結果、T22で掘り方を検出し南端を押さえることができた。また、中門（山門）推定地である南側の「くま」周辺にT24、T25を設定したが搅乱が著しく十分な成果が得られなかった。

註

（註1）永山卯三郎『岡山縣史蹟名勝天然記念物調査報告第六冊』 岡山縣史蹟名勝天然記念物調査會 1926年

（註2）1章（註14）

（註3）亀田修一「ある高句麗系瓦—美作五反庵寺出土例について—」『肥後考古第8号』1991年

（註4）正式報告は未刊であるが、『岡山縣埋蔵文化財報告9』岡山縣教育委員会 1979年に概要が記されている。



第3図 五反庵周辺切絵図（字名分布図）



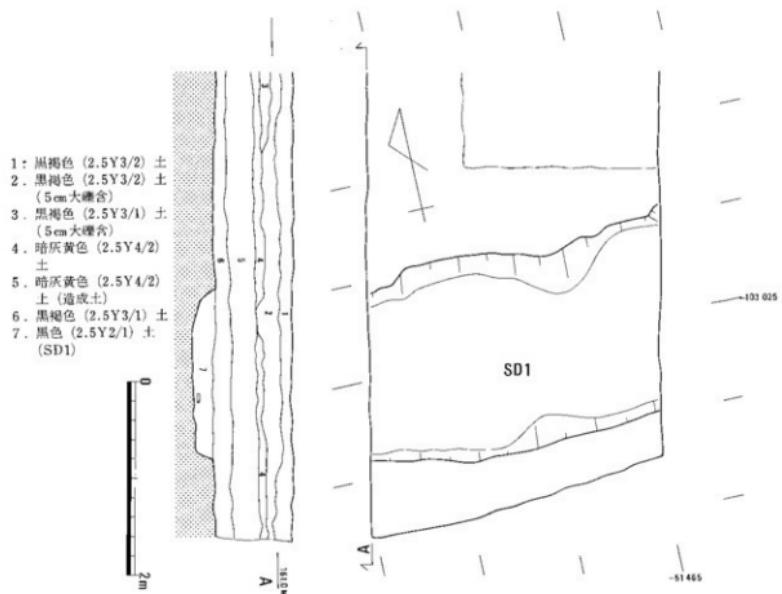
第4図 発掘調査図

III. 検出遺構

今回の調査で明らかとなつたことは、五反庵寺に関連する遺構の残りが良くないことがある。現状では、耕作土を除去するとすぐにベースとなるローム層や砂礫層の同一面上で各時代の遺構が検出できるのである。特にT11・T22のように主要建物として認識できるのは掘り込み地業の存在だけであって、聞き取り調査等によって当初予測した礎石もしくは礎石の抜取り穴や基壇の痕跡は検出することができなかつた。ここでは、まず僅かではあるが検出された五反庵寺関連の遺構を説明し、次にそれ以外の遺構を〈その他の遺構〉の項目で時代順に述べたい。

1. 溝

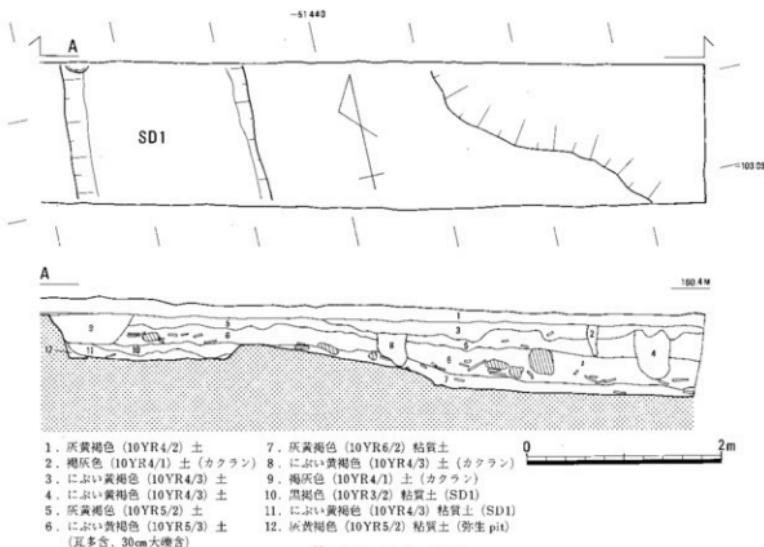
T3-SD1(第5図、図版2)は、寺域中心部の北端に位置する溝と考えられる。現状では幅約2.0m、深さ約0.2mを測る。耕作面よりかなり深い位置で検出されたものの残存状況が芳しくないのは、後世の削平が著しい為である。したがつて、この溝が築地盤や板敷に伴うものかは判然としないが、本来はかなりの深さを有していたものと思われる。底面は比較的平坦で壁面で急に立ち上がる。埋土はよくしまつた黒色土で丸瓦、平瓦等を含んでいた。T6では北側の掘り方のみではあるがこの溝の続きが検出されている。ほぼ東西方向に延びている。



第5図 T3-SD1

T15-SD1(第6図、図版3)は、寺域中心部の東端に位置する溝と考えられる。後世の削平に

より現状では幅約1.9m、深さ約0.4m程度である。底面は平坦で壁面で急に立ち上るのはT3-S D1と同じ特徴である。埋土はよくしまった粘質土で丸瓦、平瓦を含んでいた。T27でこの溝の続きが検出されている。ほぼ南北方向に延びている。ちなみにこの溝の東側はゆるやかな斜面となっており、斜面に沿って瓦類が堆積していた。



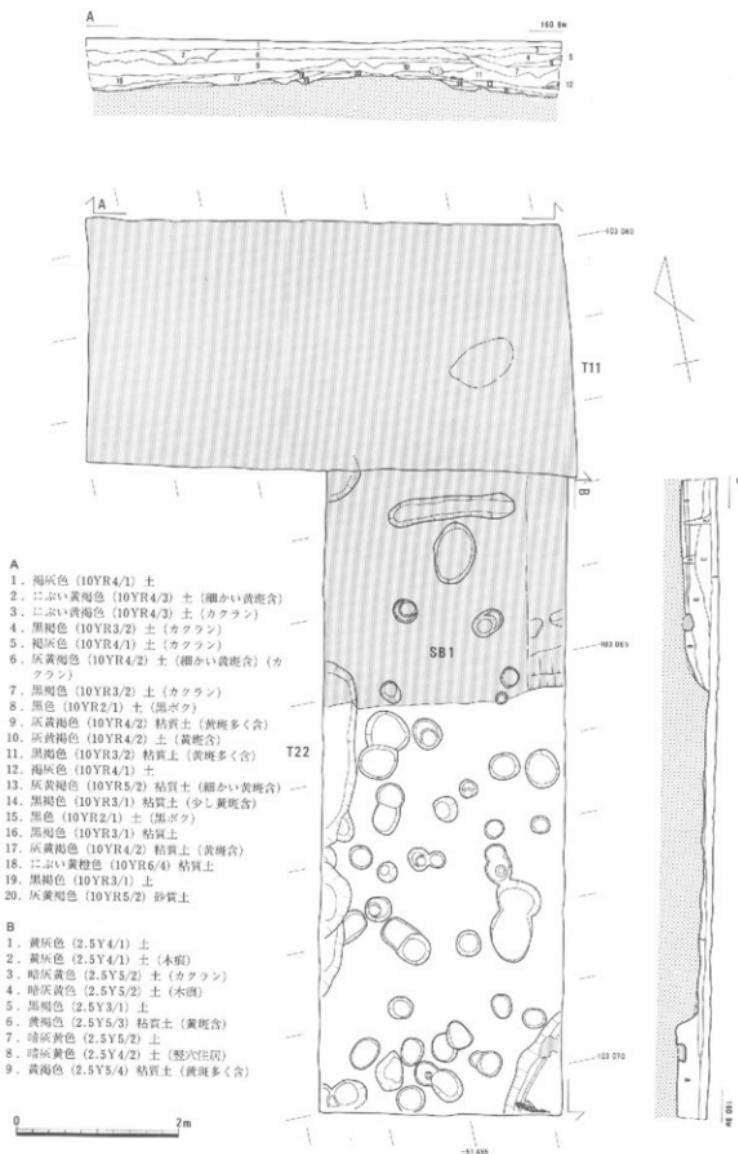
第6図 T15-SD1

2. 建 物

T22-SB1（第7図、図版4・5）は、主要建物の掘り込み地業と考えられる。全体の規模を明らかにすることはできなかったが、T22で南端と思われる掘り方を検出した。東端及び西端はそれぞれ墓地と道路として利用されていて調査できなかったが、東端についてはT23では検出できなかったことからT22に隣接する墓地内で終わることは確実である。掘り込み地業の掘り方はほぼ東西方向に直線状に延びている。掘り込みは堅い砂疊層まで及んでおり、底面の形状は比較的平坦ではあるが南東方向に向かってしだいに浅くなり、壁面で急に立ち上がる。版築は黄褐色の粘質土と黒色土を交互につき重ねてつき固めているが、それぞれの層の幅も厚く層中に最大30cm程度の礫を含んでいることなどから全体的に雑な感じである。なお、版築層から凸面のタタキ痕を丁寧に磨り消した平瓦が出土しているので、創建当初に着手した建物ではなさそうである。

3. その他の遺構

T12-SH1（第8図、図版6）は、T12東端で検出された円形の堅穴住居である。T22でも一部が検出されている。現状では、床面までの高さ約0.2mを計る。覆土に焼土や炭化物を含み焼失住居と思われる。出土した土器から、弥生時代後期のものと思われる。

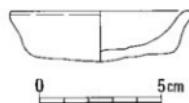


第7図 T22-SB1

T16-SH1（第9図、図版6）は床面までの高さ約0.15mを測る竪穴居である。一部のみの検出であるので詳細は不明である。弥生期のものと思われる。

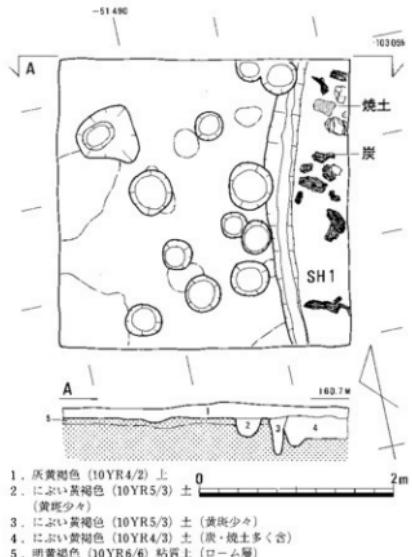
T9-SC1（第11図、図版7）は、直径約0.7mの掘り方をもつて東西方向に並ぶ4本の柱列である。何らかの建物と思われるが規模や性格の追求は行っていない。柱列の間は平均2.3mである。柱穴から瓦が出土しており、少なくとも五反庵寺創建以後の建物である。

T4-SD3（第12図、図版7・14-3）は、T4西半部の中程から始まり西に延びる溝である。幅約2.4m、深さ約0.4mを測る。多量の瓦が遺棄されていた。出土した土師器の小皿から中世に比定できる。

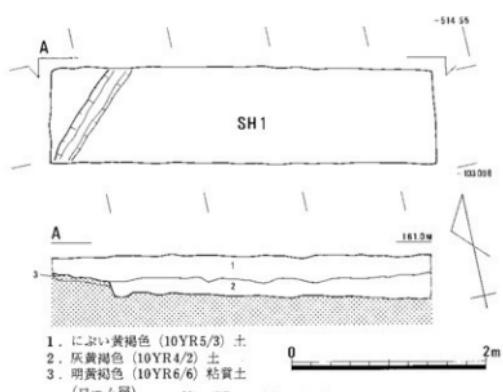


第10図 T4-SD3出土遺物

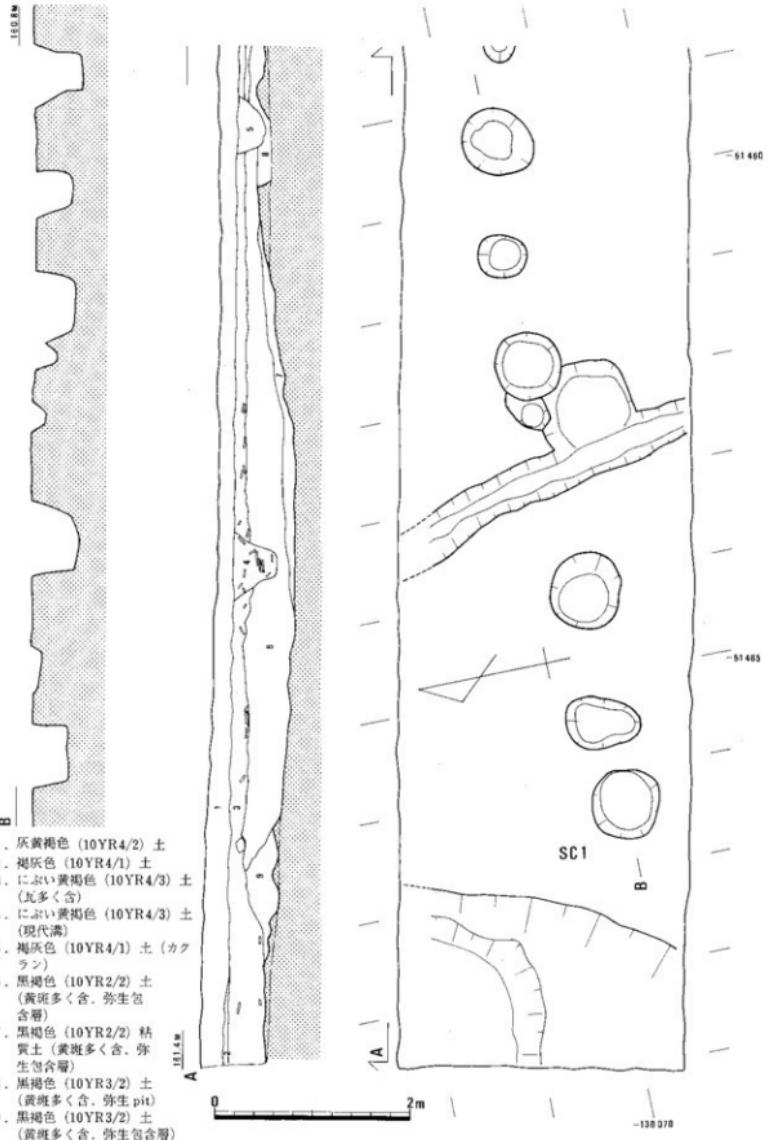
T4-SD4（第12図、図版7）は、T4-SD3に切られる南北方向に延びる溝である。多量の瓦が遺棄されていた。中世の溝と思われる。



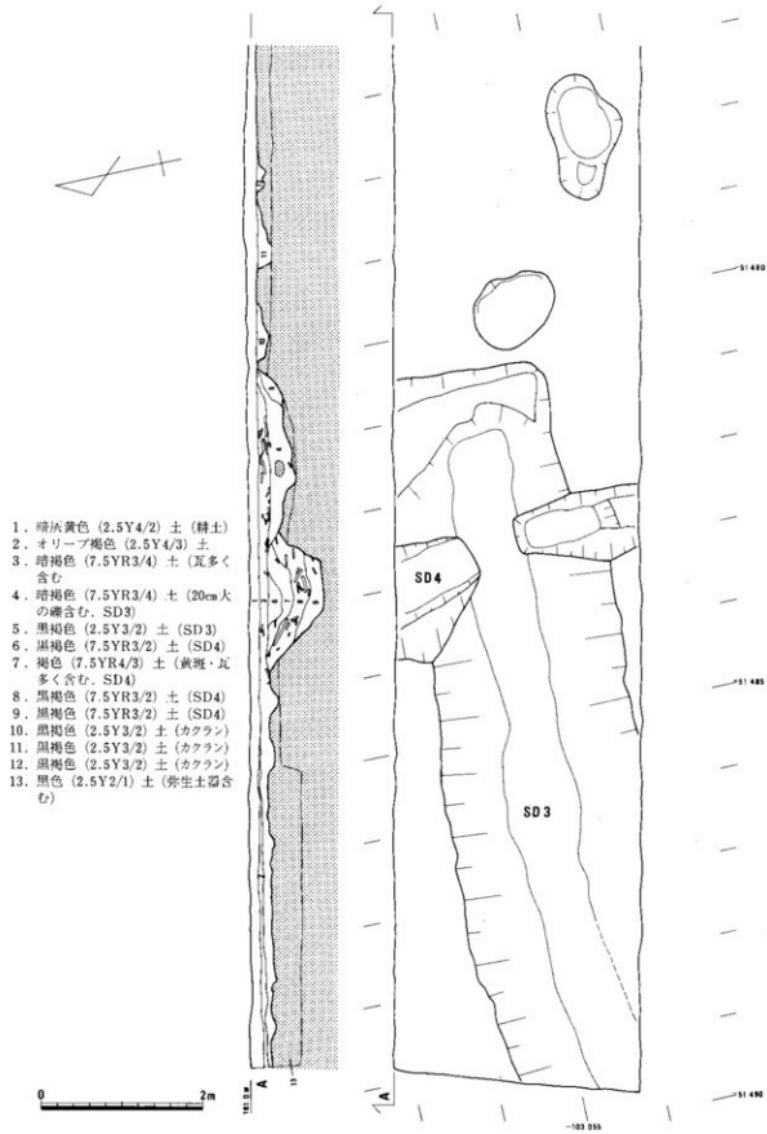
第8図 T12-SH1



第9図 T16-SH1



第11図 T9-SC1



第12図 T4 SD3, SD4

IV. 出土遺物

今回の調査で得られた遺物は、整理箱（54×34×20cm）で約130箱に相当する分量である。その大半は瓦類であり、他に弥生土器・土師器・須恵器・鉄釘等が出土している。しかし、遺物の整理が完了していないため、ここでは主要な遺物の概要について報告するにとどめたい。なお、軒丸瓦と軒平瓦の型式設定については、既存の研究成果（註1）によることとする。

1. 軒丸瓦

軒丸瓦は、I型式が7点、II型式が1点が、V型式が10点、VI型式が22点、不明が1点の計41点が出土している。

I型式（第22図I）は、単弁八弁蓮華文軒丸瓦である。全体的に、径が大きく文様が鮮明で外縁部が無文であるものをIA、その反対に径が小さく文様がぼやけた感じで外縁部に輪線文を有するものをIBとする。両者は中房に残る範キズ等から同一の範を使用しているのは明らかである。つまり、IA型式の範を改変してIB型式の範を作成したものと考えられるが、その際外縁に輪線文を加えたものである。

(1) IA型式

第13図1（図版8-1）は、全体の四分の三程度を欠失しているが、推定瓦当径約18cm厚さ約3.7～2.7cmを測る。中房付近が弧状に剝離しており、中房部分より範に粘土を充填しているものと思われる。内区の蓮弁の盛り上がり大きく、子葉の輪郭も明瞭である。丸瓦との接合は、丸瓦側は加工を行わず若干の接合粘土を當てるのみであり瓦当へのさし込みも浅い。胎土は白色砂を多く含み、焼成はやや甘い。色調は浅黄橙色（7.5YR 6/2）を呈する。T26—搅乱土中から出土している。

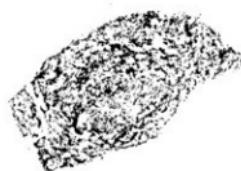
(2) IB型式

第13図2（図版8-2）は、外縁部に約1cm間隔の輪線文を巡らし、中房には1+6の蓮子を配している。瓦当径約16.7cm、厚さは中房付近で約4.1cm、外縁部では約3.0cmを測る。裏面接合部位に若干の接合粘土が加えられた後、丸瓦にそってナデ調整が施されている。瓦当裏面はヘラ削りを行わず不定方向のナデのみである。瓦当側面は、ナデ調整が施されている。胎土は白色・灰色砂を多く含み、焼成は良好である。色調は灰黄色（2.5Y 6/2）を呈する。T4-S D 3で出土している。この軒丸瓦は、瓦当の中房をとりまくように粘土の継ぎ目がみられ、まず範において凹部になる中房周辺から粘土を充填し、その後範全体に粘土を充填していった様子が伺える。他にも中房付近が弧状に剝離した状態で出土した第13図1のような例があり、こうした製作技法がこの種の瓦に普遍的に行われていたようである。

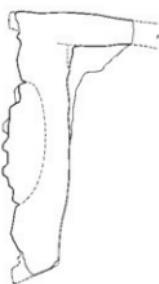
同図3（図版8-3）は、瓦当径約16.9cm、厚さ約3.2～2.2cmを測る。瓦当面は、子葉の輪郭も明瞭でなく、範の木目に沿って数カ所の範キズも目立つなど粗雑である。丸瓦との接合部位を大きく欠いているが、接合粘土をあてる前に強くナデつけていたためその部位が溝状となって残っている。瓦当裏面は、不定方向のナデを施している。胎土には白色砂を含み、焼成はやや甘い。色調は浅黄橙色（7.5YR 8/3）を呈する。T15—東端落込みから出土している。

(3) II型式

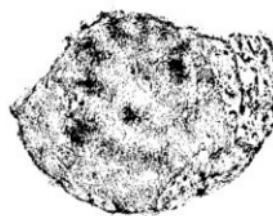
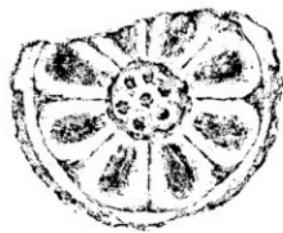
II型式（第22図II）は、素弁11弁蓮華文軒丸瓦である。内区に木の実状の蓮華文を配する特徴か



1



2



3



4



第13図 軒丸瓦拓影・実測図 (1)

ら、高句麗・新羅様式（註2）の瓦と考えられているものである。中房には1+6のやや大きめの蓮子を配している。外区は唐草状の文様を巡らす。今回は小片1点のみの出土である。

第13図4（図版9-3）は、外区から外縁部にかけての小片である。胎土は白色・灰色の砂粒を含み焼成は良好である。色調は灰黄色（2.5Y 7/2）を呈する。T23—撲乱土から出土している。

(4) V型式

V型式（第22図V）は、素弁11弁蓮華文軒丸瓦である。N型式と同様、高句麗・新羅様式の瓦と考えられているものである。

第14図1（図版9-1）は、瓦当径約22.0cm、厚さは中房付近で約2.9cm、外縁部で約3.0cmを測る。外区は13の木の実状の蓮弁の間に2重の弧文を配し、その外側に1重の圓線を巡らしている。外縁部にもやや太めの1重の圓線を巡らしている。裏面接合部位は丸瓦先端部に格子状のキザミを入れて瓦当と接合し、若干の接合粘土を加えた後丸瓦にそってナデ調整が施されている。瓦当裏面は横方向のヘラケズリ後、周縁部にそって約3.5cmの幅でナデ調整が施されている。胎土は白色砂を含み、焼成はやや甘い。色調は浅黄色（2.5Y 7/4）を呈する。T 4—SD 3から出土している。

同図2（図版9-2）は、瓦当径約22.0cm、厚さ約2.7cm程度である。裏面接合部位は丸瓦の先端に格子のキザミを入れて接合し、若干の接合粘土を加えたのちナデ調整を施している。丸瓦の瓦当へのさし込みは浅い。胎土は白色砂を含み、焼成はやや甘い。色調は灰白色（2.5Y 8/1）を呈する。T 3—造成土から出土している。

(5) VI型式

VI型式（第22図VI）は、細弁32弁蓮華文軒丸瓦である。この種の瓦も他に類例が無く、高句麗・新羅様式の瓦と考えられている。

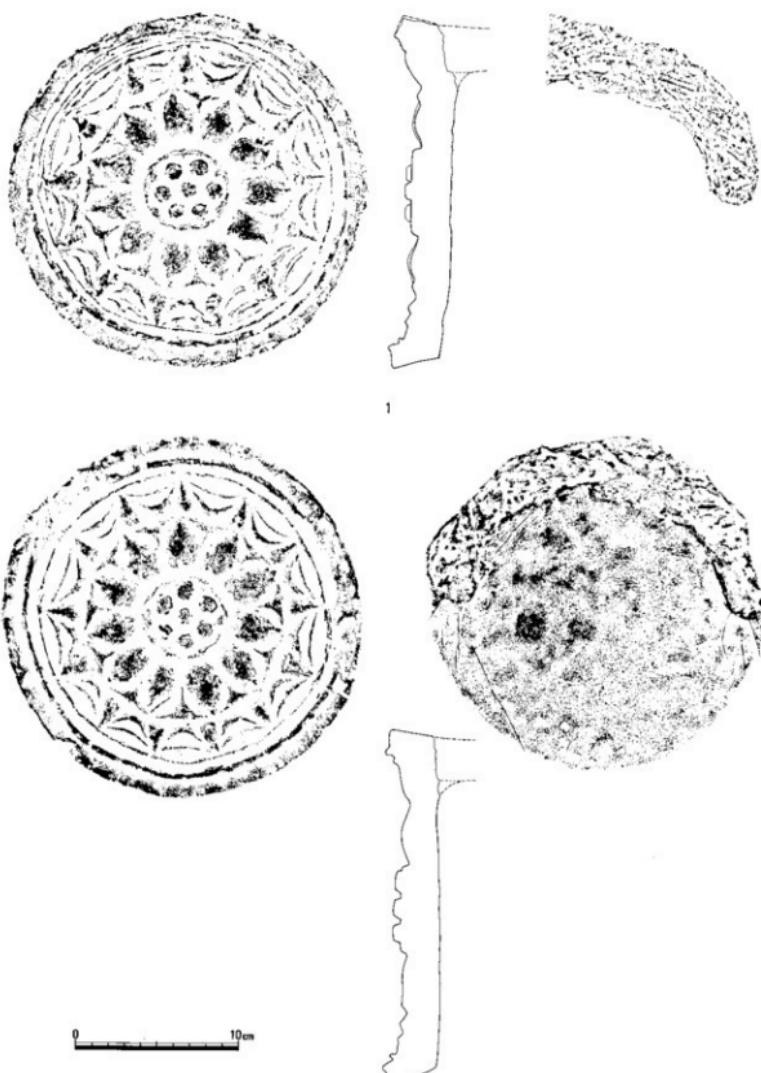
第15図1（図版10-1）は、瓦当推定径約20.6cm、厚さは中房付近で約2.3cm、外縁部約1.7cmを測る。中房には1+8の小ぶりの蓮子を配し、内区には細長いやや肉厚の蓮弁を32枚有している。このため、間弁は小さく三角形となり帶状に蓮弁の周りを巡っている。外区は4重の細い圓線を巡らし、それを放射状の細線で16に分割している。外縁部にはやや太めの1重の圓線を巡らしている。裏面接合部位は、丸瓦を浅く接合し接合粘土を加えている。胎土は白色砂を含み、焼成は甘い。色調は灰白色（5Y 8/1）を呈する。T 4—瓦溜まり2から出土している。

同図2（図版10-2）は、瓦当径約16.7cmは中房付近で約3.5cm、外縁部で約2.5cmを測り第図1よりも厚手のものである。瓦当面は二次的に熱が加わっているために薄膜状に剥離している。裏面接合部は丸瓦凸面側に接合粘土厚く加えている。その際、丸瓦と瓦当との間に凸面側から丸く棒状の工具で粘土を詰め込んでいる。瓦当裏面はナデ調整を、周縁部はヘラケズリを施している。胎土はやや大粒の白色・灰色砂を含み、焼成は良好である。色調は灰色（5Y 5/1）を呈する。T 10—撲乱土から出土している。

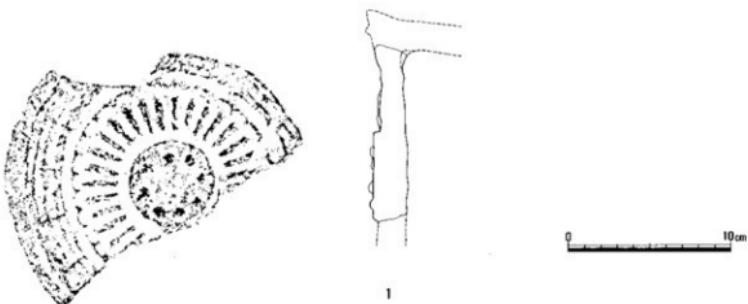
2. 丸 瓦

今回の調査で出土した丸瓦には、大別すると行基葺式と玉縁式がある。出土量の大半は前者である。

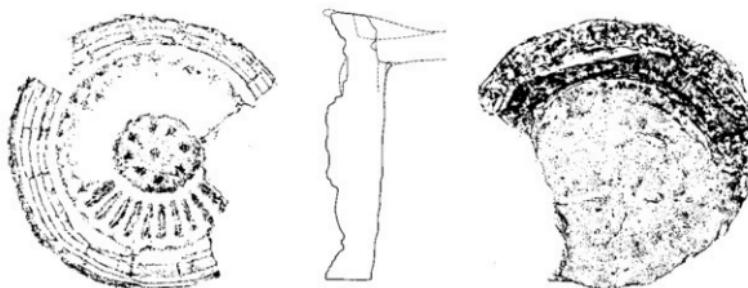
第16図（図版11-1）は、広端幅約18.5cm、高さ約8.7cm、長さ約37.5cmを測る行基葺式の丸瓦である。凸面は、横方向のヘラケズリと丁寧なナデによってタタキ痕はほとんど磨り消されている。凹面



第14図 軒丸瓦拓影・実測図 (2)



1



2

第15図 軒丸瓦拓影・実測図（3）

は、成形時に使用された模骨痕が明瞭に残っており、模骨の幅は約1.5cmである。また、粘土板の合せ目と布縫目痕も認められ、布目は3cmあたり27本と比較的細かく乱れもない。側面及び端面は、ヘラケズリを施したあと狭端面を除き凹面側面取りを行っている。胎土には白色砂を多く含み、焼成はやや甘い。色調は灰白色（2.5Y 8/2）を呈している。T 4—SD 3から出土している。

第17図1（図版11—2）は、広端幅推定約19cm、高さ約8.7cmを測る行基葺式の丸瓦である。凸面には格子叩きが施されたのち横方向のヘラケズリとナデ調整で磨り消されるものの、一部が残っている。内面には幅約4.5～7.0cmの粘土紐巻き上げ痕と3cmあたり27本の乱れた布目痕が残る。側面と端面は、ヘラケズリが施され凹面側は面取りを行なっている。胎土は白色砂を多く含み、焼成は良好である。色調は灰白色（5Y 7/1）を呈する。T 4一瓦だまり1から出土している。

同図2（図版11—3）は、広端幅約19.2cm、高さ約8.6cmを測る行基葺き式の丸瓦である。凸面のタタキ痕は丁寧なヘラケズリとナデ調整によって磨り消されている。側面と端面はヘラケズリが施され、側面側のみ凹面側が面取りされている。凹面には3cmあたり22本の布目痕が認められる。胎土は白色・灰色砂を含み、焼成は良好である。色調は灰色（5Y 6/1）を呈する。T 4一瓦だまり1から

出土している。

同図3(図版11-4)は、玉縁を有する丸瓦である。玉縁の長さ約6.4cm、玉縁肩部幅約11.8cmを測る。凸面は横方向のヘラケズリとナデ調整によって格子タタキ痕が消されているが一部が残っている。凹面は3cmあたり22本の布目痕と布綴目痕が残る。側面は凹面側に狭く面取りが施されている。胎土は細かい白色砂を多く含み、焼成は甘い。色調は灰白色(5Y7/1)を呈する。T4-SD3から出土している。

3. 軒平瓦

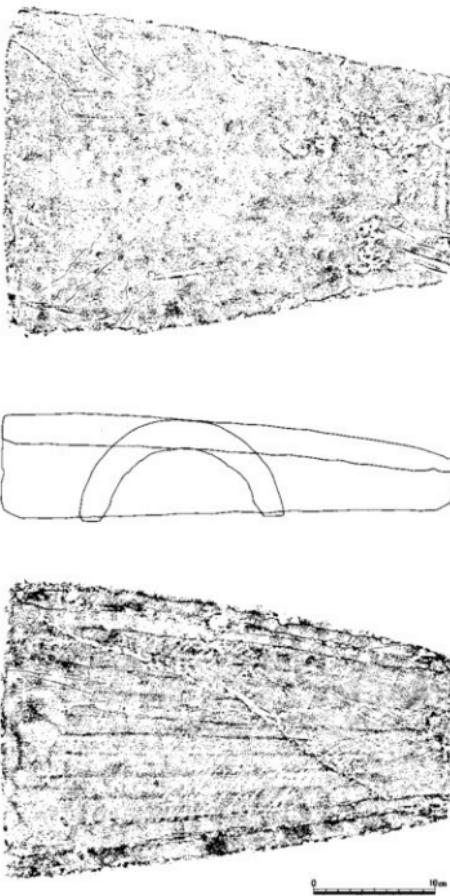
今回出土した軒平瓦は、7点である。松本の分類によればⅡ型式(註3)が6点、不明が1点である。

(1) Ⅱ型式

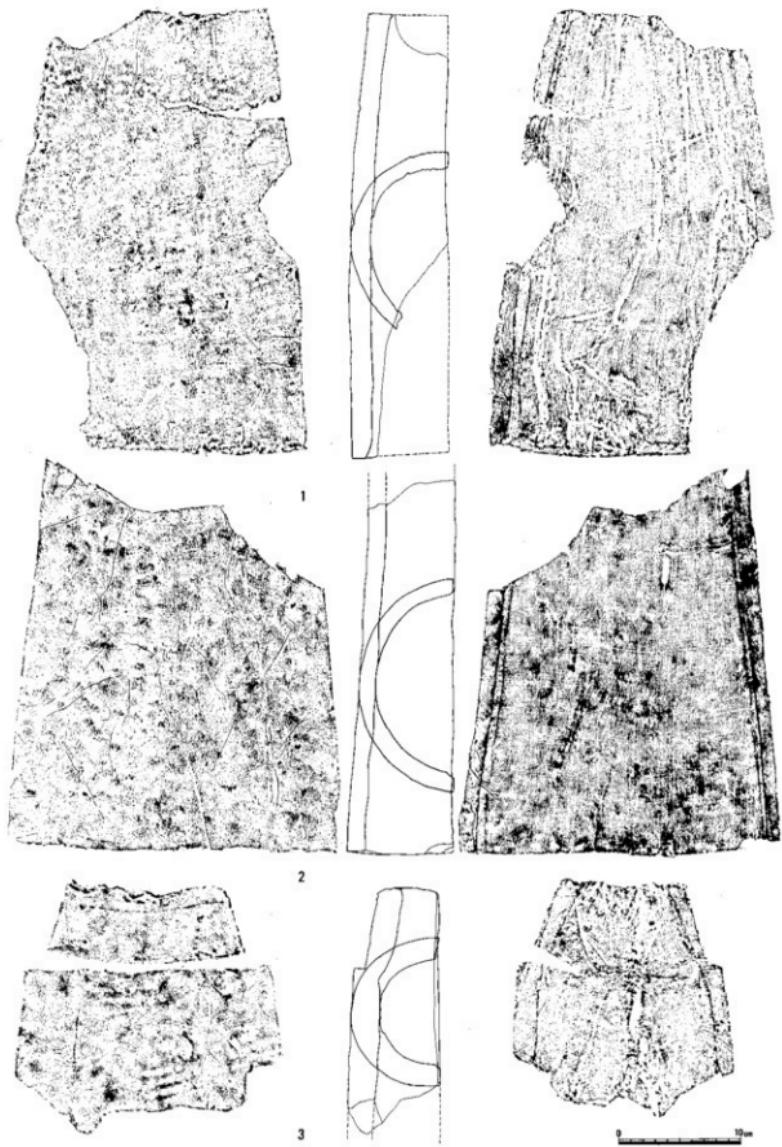
Ⅱ型式(第22図Ⅱ、Ⅲ)は偏行唐草文軒平瓦である。

第18図1(図版12-1)は、瓦当に左行する4単位の太めの唐草をもち、界線によって内区と外区を画する。外区には内向きの鋸歯文を配している。瓦当の厚さ約5.0cmである。直線顎に近いゆるやかな曲線顎をもち瓦当面にそってヘラケズリにより面取りが施されている。平瓦凸面は横方向のヘラケズリとナデ調整によってタタキ痕が消されている。凹面は幅約3.5cmの模骨痕と3cmあたり27本の布目痕が残っている。胎土は細かい白色砂を含み、焼成は良好である。色調は灰白色(5Y7/2)を呈する。T15-東端落ち込みから出土している。

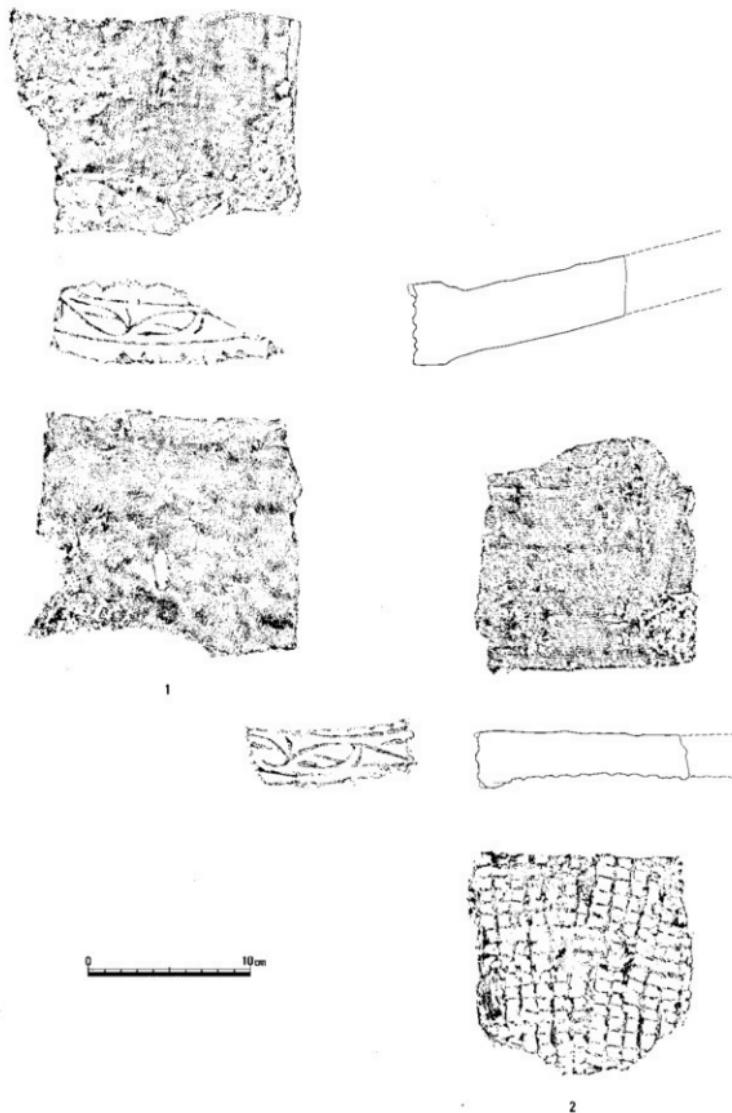
同図2(図版12-2)は、瓦当の厚さ約3.3cmである。平瓦凸面には0.7cm×0.7cmの正格子のタタキ痕が残っている。凹面は幅約3.7cmの模骨痕と3cmあたり19本の布目痕を残している。また粘土板の合わせ目も認められる。側面はヘラケズリがおこなわれている。窓に対し平瓦が薄いため外区の鋸歯文の一部しか表現されていない。胎土は細かい白色砂を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙



第16図 丸瓦拓影・実測図(1)



第17図 丸瓦拓影・実測図 (2)



第18図 軒平瓦拓影・実測図

色（10YR 7/4）を呈する。T 4—SD 3から出土している。

4. 平瓦

今回の調査で出土した平瓦は、桶巻きによるものと凸型台によるものとがある。

第19図1（図版12—3）は、長さ約44.9cm、広端幅約27.8cm、厚さは約3.5～2.8cmを測る。凸面は横方向のヘラケズリ後丁寧なナデ調整が施され、タタキ痕が完全に消されている。側面には糸切り痕が残り、その上からヘラケズリで行っている。凹面には糸切り痕と幅約3cmの模骨痕と3cmあたり29本の細かな布目痕が残っている。胎土は細かい白色・灰色砂を多く含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色（10YR 6/4）を呈する。T 4—SD 3から出土している。

同図2（図版13—1）は、長さ約34.6cm、厚さは2.6～1.5cm、広端幅約25cmになると思われる。凸面は0.7×0.5cmの格子タタキ痕を、横方向のヘラケズリと縦方向のナデ調整で磨り消している。凹面には糸切り痕と幅約2.3cmの模骨痕それに3cmあたり31本の細かな布目痕が残っている。両端面と側面はヘラケズリが施されている。また、凹面の両端面及び側面側には面取りが施されている。胎土は砂をあまり含まず、焼成は良好である。色調は灰色（10Y 7/1）を呈する。T 4—SD 3から出土している。

第20図1（図版13—2）は、現在長約40cm、同幅は約27cm、厚さは約2.6～1.5cmを測る。凸面には0.8×0.6cmの格子タタキ痕が残っている。凹面は幅約3cmの模骨痕と3cmあたり24本の布目痕が認められる。側面及び狭端面側にはヘラケズリが施され、また、凹面の狭端面側には面取りが施されている。胎土は大粒の白色砂を含み焼成はやや甘い。色調はにぶい橙色（7.5YR 6/4）を呈する。T 4—SD 3から出土している。

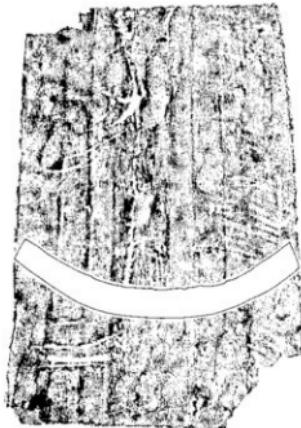
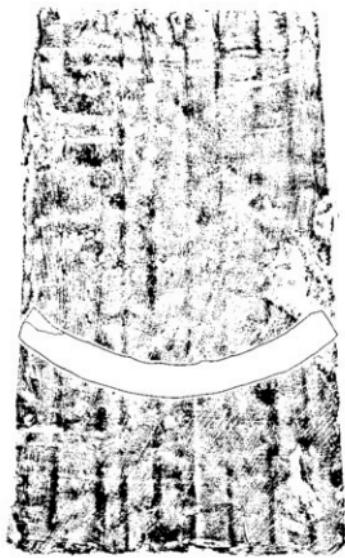
同図2（図版13—3）は、凸型台による一枚作りの平瓦である。狭端幅約22.5cm、厚さ約2.5cmを測る。凸面には縦方向の繩タタキが施され、凹面には3cmあたり19本の布目痕が残っている。側面はヘラケズリが、凸面側に面取りが施されている。狭端面と凹面の一部には凸型台の木目が残っている。胎土は粗い白色砂を多く含み、焼成はやや甘い。色調は暗青灰色（10BG 3/1）を呈する。T 4—瓦溜まり1から出土している。

同図3（図版13—4）は、2と同じく凸型台による一枚作りの平瓦である。狭端幅約24.1cm、厚さ約2.3cmを測る。凸面の繩タタキは2と異なり横方向である。凹面には3cmあたり15本の布目痕が残る。側面と狭端面にはヘラケズリが施され、それぞれ凹面側に面取りが行われている。胎土は粗い白色・灰色砂を多く含み、焼成は良好である。色調は黄褐色（2.5Y 5/3）を呈する。T 4—SD 3から出土している。

5. 鶴尾

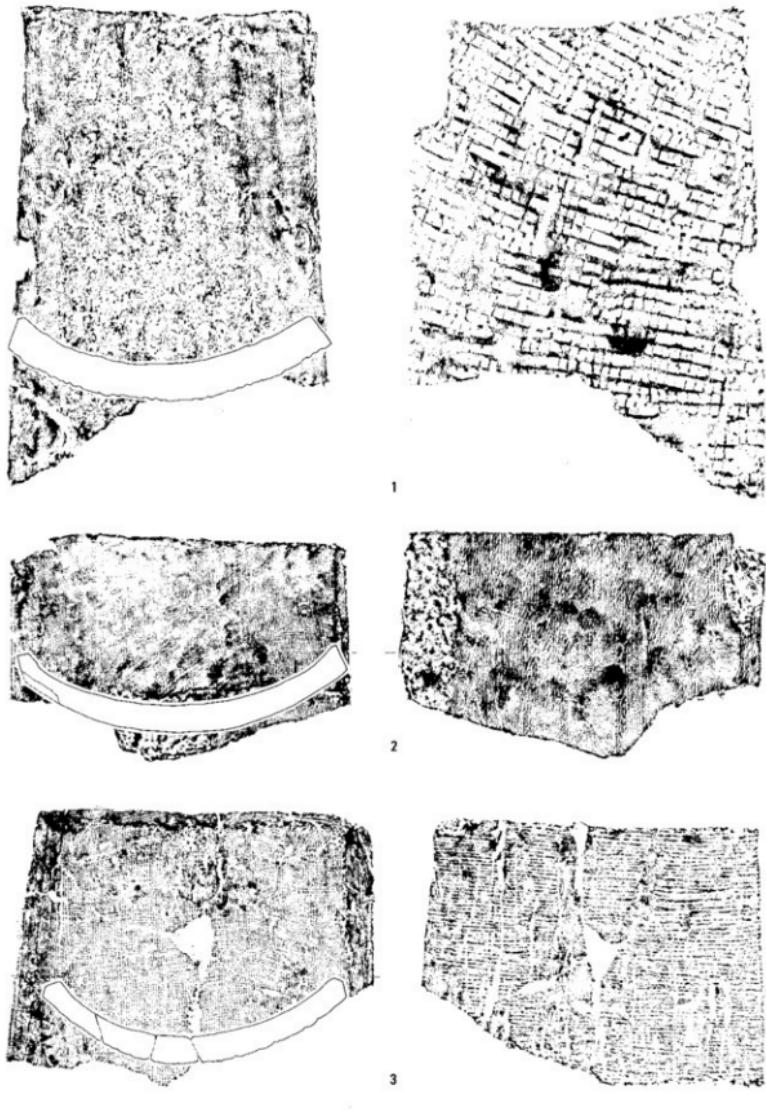
今回の調査では鶴尾片が1点出土している。

第21図1（図版14—1）は、小片であるため上下の判別が困難であるが、段の方向が放射状に広がっていることから鱗部が屈曲する部分の破片と思われる。表面は段に平行してナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整が施されている。今日までに出土している鶴尾（2個体）とは別の個体と思われる。最大厚約3.2cmを測る。胎土は白色砂を含み焼成は良好である。色調は青灰色（10BG 5/1）を呈する。T 23—搅乱土から出土している。



10mm

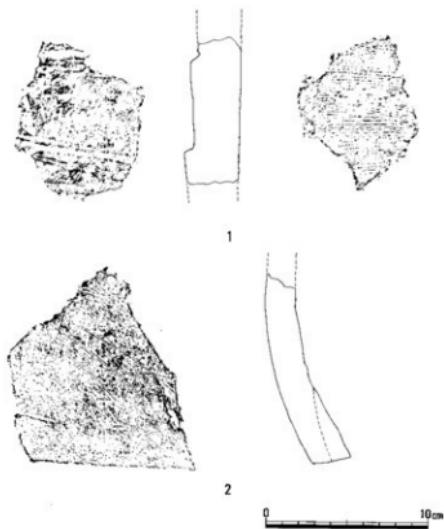
第19図 平瓦拓影・実測図 (1)



第20図 平瓦拓影・実測図 (2)

6. 線刻瓦

第21図（図版14-2）は、平瓦凸面に鋭利なナイフ状の工具で幾何学的文様を施している。平瓦凸面は横方向のヘラケズリとナデ調整によってタタキ痕を丁寧に消している。凹面には、粘土板合わせ目、糸切り痕及び布目痕が認められる。胎土は白色砂を含み、焼成は良好である。暗青灰色（5B3/1）を呈する。T4-SD3から出土している。



第21図 鶴尾、線刻瓦拓影・実測図

註

（註1）松本和男「五反廐寺」『岡山県史第二巻原始・古代1』岡山県史編纂委員会 1991年

（註2）Ⅱ章（註3）

（註3）（註1）の文献では軒平瓦を7型式に分類しているが、このうちⅡ型式とⅢ型式は今回の調査で同一の範を使用していることが明らかになった。したがって、この報告書ではすべてⅡ型式として分類した。

V. まとめ

1. 遺構

今回の調査で検出した五反廃寺関連の遺構は、寺域の北と東を画する溝と主要建物の掘り込み地業のみである。全般的に遺構の残りは悪く、表土を除去するとすぐに各時代の遺構が同一面で検出できるケースがほとんどで、溝や掘り込み地業などの残りもわずかであった。また、墓地や茶烟となり実質的に発掘調査が不可能な場所も多く、今後の調査に先送りした課題も多い。ここでは、ひとまず今回の調査を含めて今日までの知見を整理してみたい。

寺域については、北端部で検出した溝と東端部で検出した溝の形状が類似する点、それらの延長線がほぼ直交すること及び主要建物の掘り込み地業の掘り方の方位が崩すことから、寺域を画するものと考えたが、それが築地塀に伴うのか、板塀に伴うのかは明らかにできなかった。西端部及び南端部については検出できなかったものの南端部については現在の赤線道付近と思われる所以、ほぼ1町四方の寺域が想定される。ここで問題となるのは、寺域の主軸は現在の地割りの方位とは異なっていることである（註1）。この点については元々は主軸を南北にもつ地割りが、その後何らかの理由で地割りの大変更を伴う開発が行われた可能性を指摘できる。少なくとも中世と考えられるT 4-S D 3が東西の方位を指向している点から、中世以降に施行されたものと思われる。

建物については掘り込み地業によってその存在が認識されるもので、規模については明らかにすることができなかつたが、位置的にみて1町四方の寺域の中軸上の建物と思われる。また、この建物の北側に広い空間があるところから他の主要建物の存在が想定される。仮に南面する伽藍配置を想定すれば講堂・金堂・塔が一列に並ぶ四天王寺式の伽藍配置の可能性を指摘できるのではないかろうか。なお掘り込み地業の版築層からタキ真を丁寧に磨り消した平瓦等が出土しており、この建物自体は創建当初に着手した建物ではなさそうである。

2. 遺物

今回の調査に伴う出土遺物の大半は瓦類である。しかし、後世の削平によって出土量は少なく倒壊時の状況を示す遺物はなく、いづれも2次的な堆積状況を呈していた。軒丸・軒平瓦については、すべて從来型式のものであったが、表掲資料の出土状況等からみても軒丸瓦ではI型式、V型式及びVI型式が、軒平瓦ではI型式とII型式が主要な瓦であり、それ以外は差替え瓦か補修瓦と思われる。また、今回創建瓦と考えられるI型式の軒丸瓦について周縁に幅線文を有する一群があることが判明した（註2）。この種の軒丸瓦が渡来系氏族の寺院に用いられたと指摘（註3）もあり、五反廃寺が創建時から渡来系氏族の何らかの関与があったことが窺える。ただ、五反廃寺の例が当初は幅線文をもたず（IA型式）、範の作り直しのときに加えられている点（IB型式）が疑問として残る。この点については、所謂山田寺式の亜流とされるI型式の軒丸瓦自体が本来の山田寺式とは異なる点も多く、五反廃寺を建立した豪族のもつ朝鮮半島との独自つながりのものに生み出された文様の可能性もある。また、I型式の軒丸瓦は範に粘土を充填する際に、まず最初に中房付近のみを成形する手法も、この瓦の独自性を示すものであろう。

N～VI型式の所謂高句麗・新羅様式の軒丸瓦については、VI型式の軒丸瓦について寺域の北半部で

22点中18点の出土があり、後世の削平により瓦の移動が著しいことを考慮してもその集中度は注目される。今回検出された建物の北側に位置する建物に使用されたものであろうか。

瓦の組合せや製作年代については整理が済んでいないこともあり、今後丸瓦・平瓦の数的処理の成果を含め再検討する必要があるが、私見では軒丸瓦Ⅰ型式が7世紀第3四半期、軒丸瓦Ⅳ、V型式と軒平瓦Ⅰ型式とがセットとなり7世紀第4四半期から8世紀初頭にかけて、軒丸瓦Ⅵ型式と軒平瓦Ⅱ型式がセットとなり8世紀初頭から前半にかけてと考えられる（註4）。

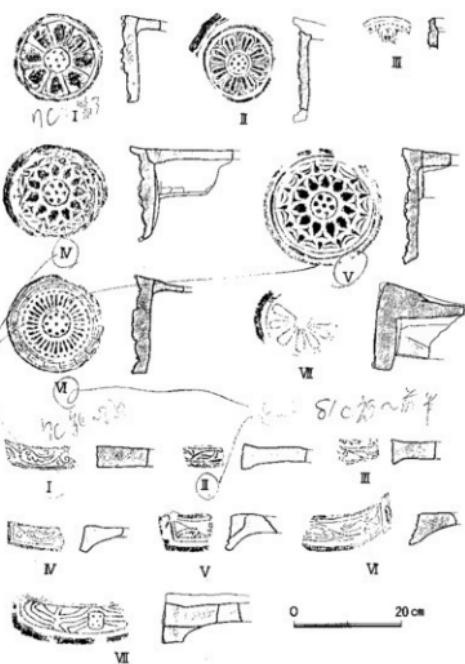
3. 五反庵寺の性格

最後に、五反庵寺を建立した豪族について考えてみたい。これは、当時の美作地方の政治体制を知る上で、たいへん興味深いテーマである。

美作地方の白鳳寺院の性格については、地域支配のための公的性格をもつ郡寺であると考えられている（註5）。この点については異論はないが、五反庵寺においては一貫して独自色の強い瓦を使用している意味を考える必要があるように思われる。こうした点から五反庵寺を建立した豪族の性格を考えるなら、律令的政治体制に組み込まれながらも一定の独立性を持ち続けた渡来系の豪族と考えるのが妥当ではなかろうか。

註

- （註1）寺域の東端に位置する道路を例にとれば、約12度東偏している。これはこの丘陵周辺に認められる条里制遺構の方位とは異なる。
- （註2）今回の調査で輻線文を持つ個体が出土したため、今一度既存資料を確認したところⅠB型式の多くの個体に輻線文が確認できた。
- （註3）山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所編 同朋舎出版
- 1983年
- （註4）五反庵寺の瓦の年代観については、主に次の文献を参考にした。



第22図 五反庵寺出土軒瓦 <IV章(註1) 文献を一部改変>

- 伊藤 晃「初期寺院と瓦」『吉備の考古学』近藤義郎・河本清編 福武書店 1987年
- 出宮徳尚・葛原克人・河本清「古代」『岡山県の考古学』近藤義郎編 吉川弘文館1987年
- 出宮徳尚・伊藤 晃・岡本寛久・駒井正明「集成17瓦当文」『吉備の考古学的研究(下)』
近藤義郎編 山陽新聞社 1992年
- 渢 哲夫『美作の白鳳寺院』津山郷土博物館 1992年
- (註5) 渢 哲夫『美作の白鳳寺院』津山郷土博物館 1992年

図版 1



1. 久世町市街地（南から、航空撮影）

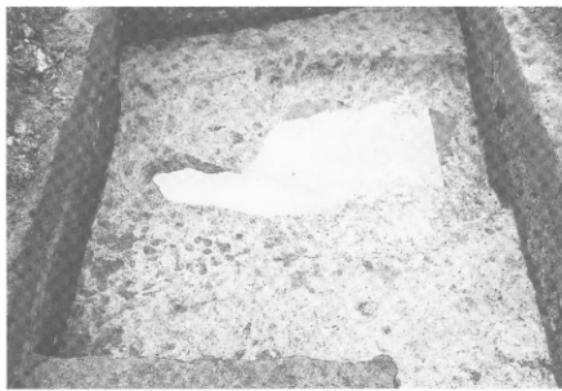


2. 五反庵寺周辺（東から、航空撮影）

図版2



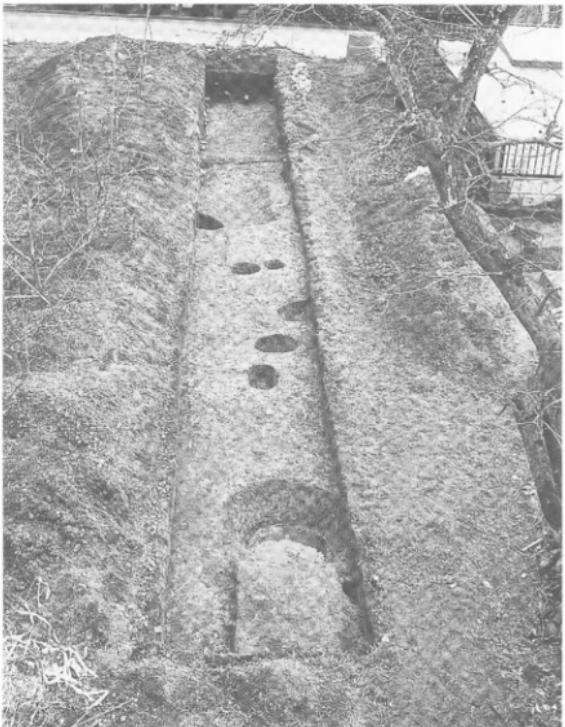
1. T3 (南から)



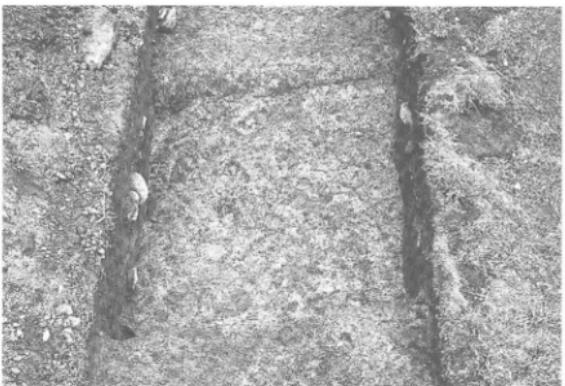
2. T3-SD1 (北から)

図版3

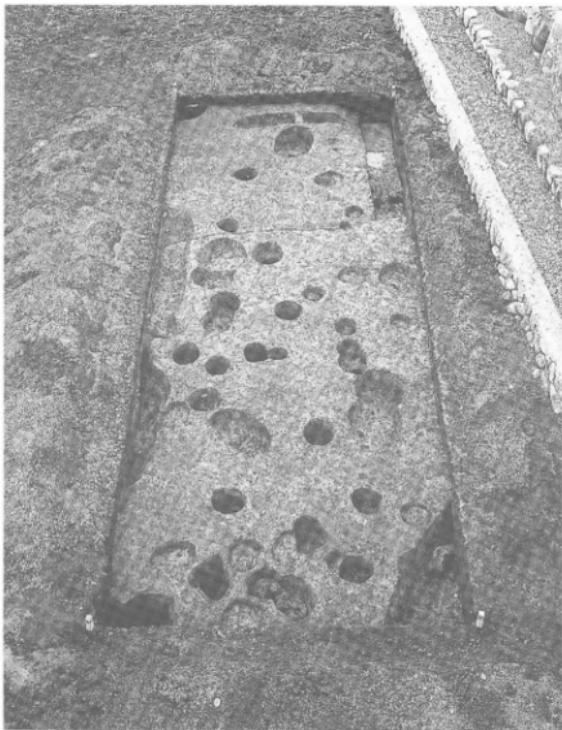
1. T15 (西から)



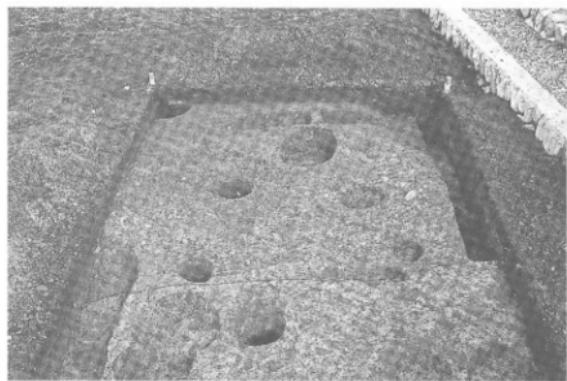
2. T15-SD1 (西から)



図版4



1. T22 (南から)

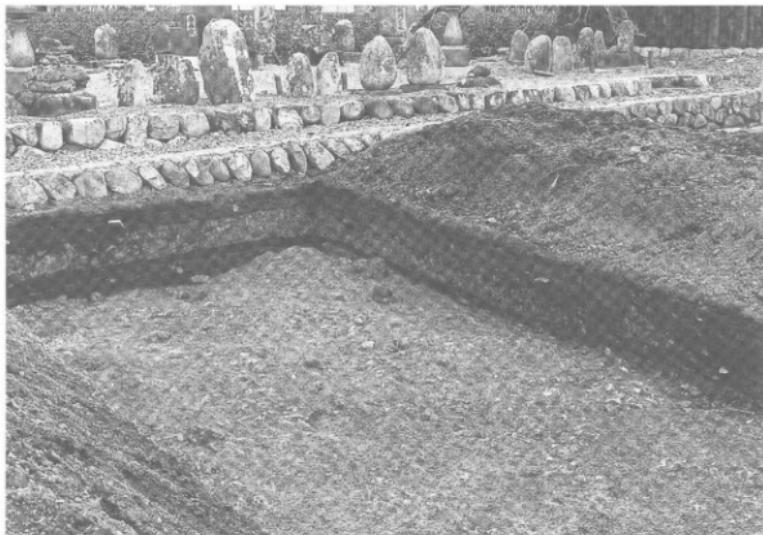


2. T22-SB1
(南から)

図版 5

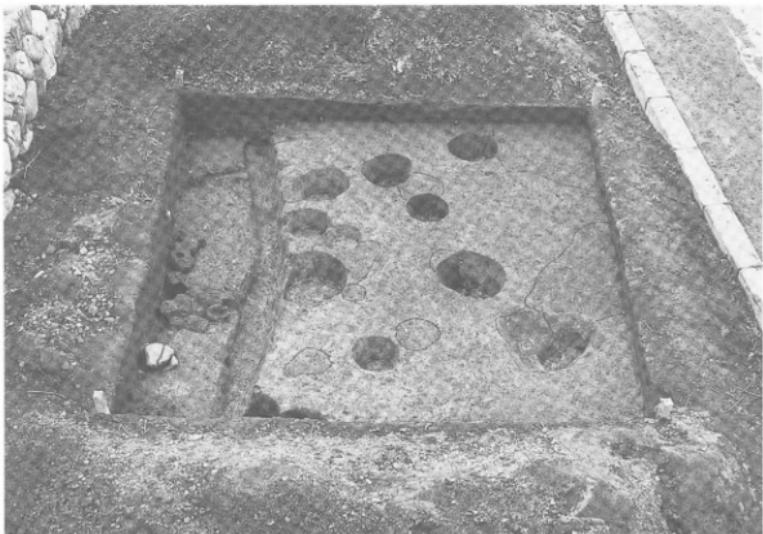


1. T22-SB1 土層断面図（北西から）

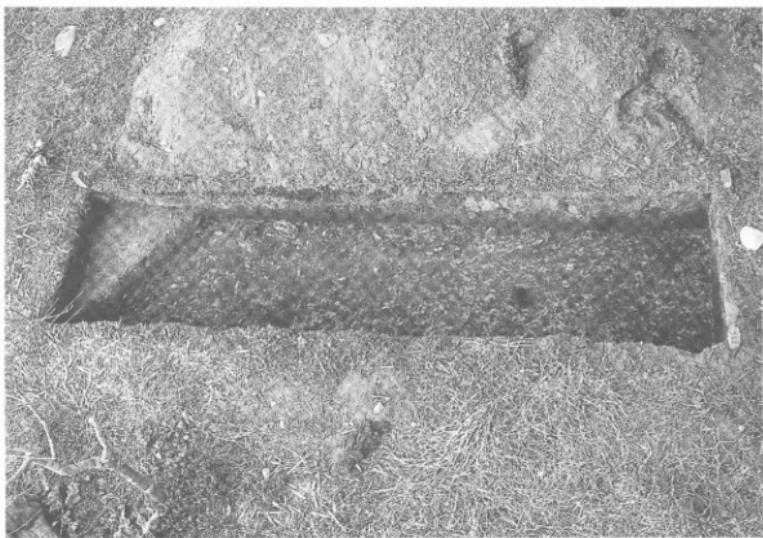


2. T11-SB1 土層断面図（北西から）

図版 6

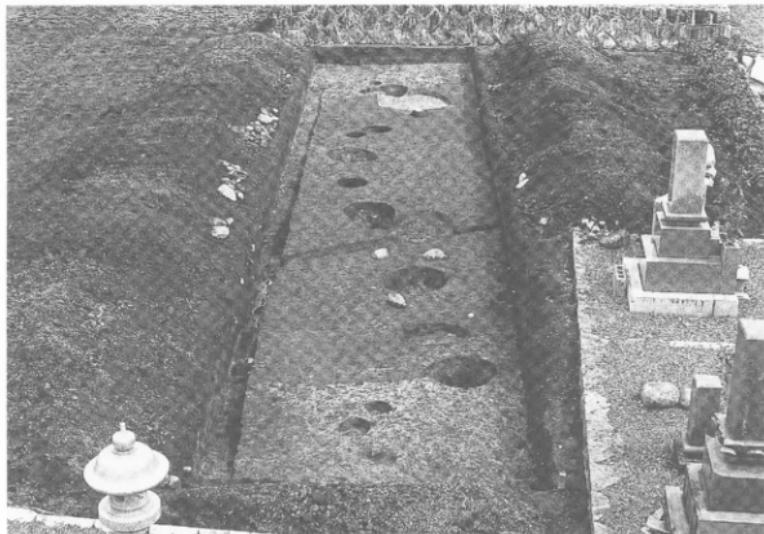


1. T12-SH1 (北から)

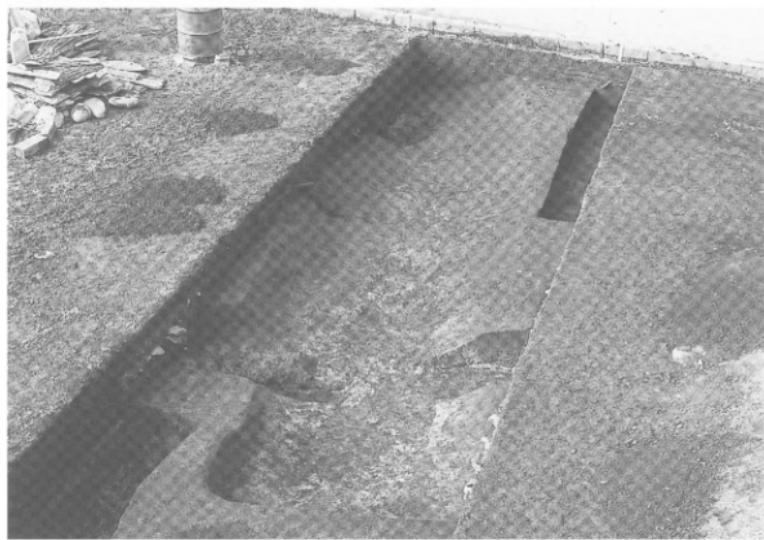


2. T16-SH1 (南から)

図版 7

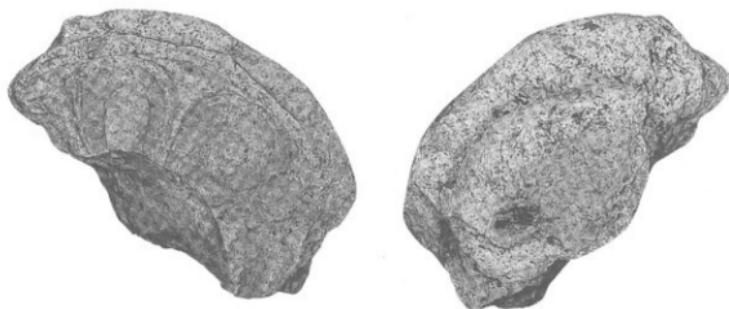


1. T9 (西から)

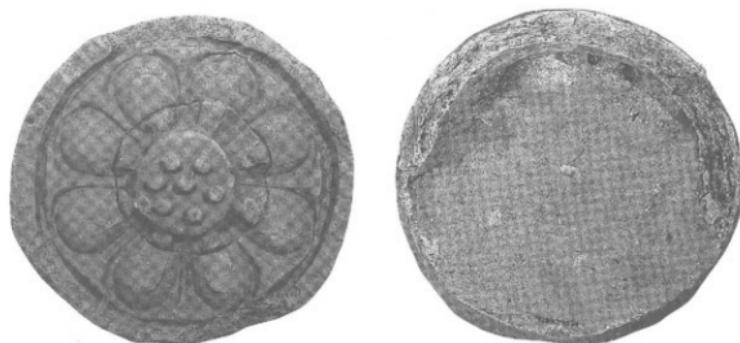


2. T4-SD3、SD4 (東から)

図版 8



1. 軒丸瓦ⅠA型式

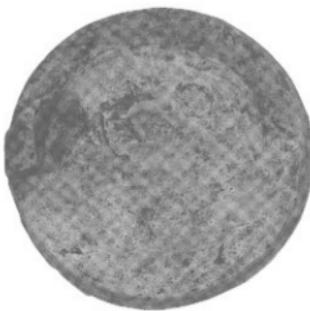


2. 軒丸瓦ⅠB型式

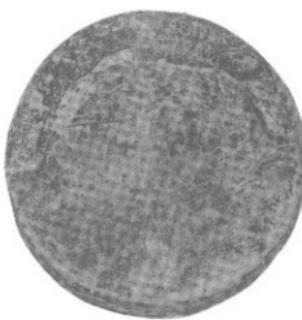


3. 軒丸瓦Ⅱ型式

図版 9



1. 軒丸瓦 V型式



2. 軒丸瓦 V型式

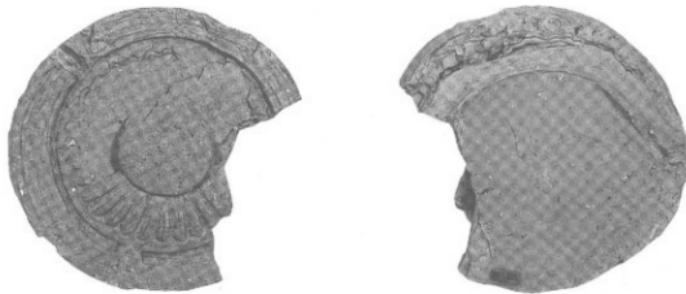


3. 軒丸瓦 IV型式

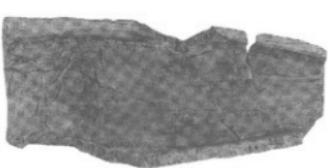
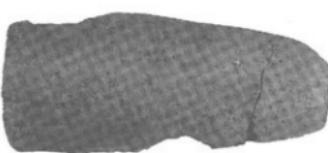
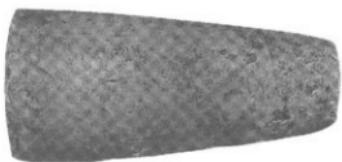
図版10



1. 軒丸瓦 VI型式

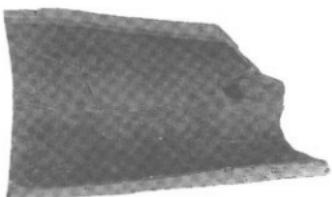
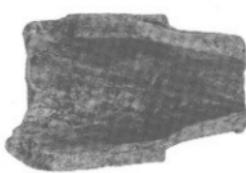


2. 軒丸瓦 VI型式



1

2

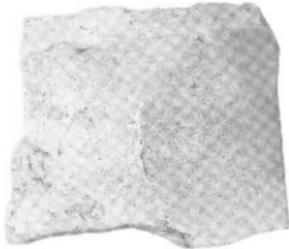


3

4

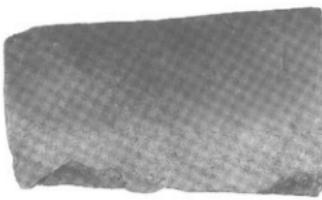
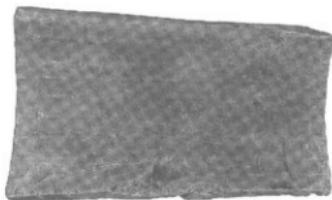
九 瓦

図版12



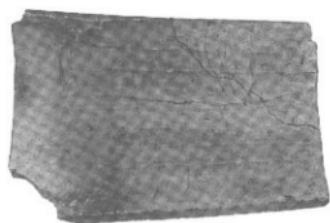
1. 軒平瓦Ⅱ型式

2. 軒平瓦Ⅲ型式



3. 平 瓦

図版13



1

2



3

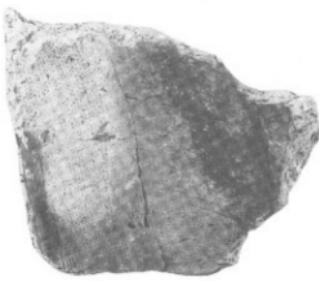
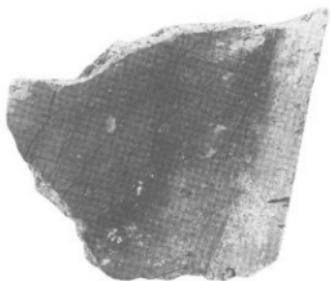
4

平 瓦

図版14



1. 鶴尾



2. 線刻瓦



3. 土師器

報告書抄録

| ふりがな | ごたんはいじ | | | | | | | |
|---------------|---|------------|-------------|-----------------|---|--|-------------------|------|
| 書名 | 五反庵寺 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 久世町埋蔵文化財発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第2集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 池上 博 | | | | | | | |
| 編集機関 | 久世町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒719-32 岡山県真庭郡久世町大字久世2932-5 TEL0867-42-1116 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1997年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在 地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 | |
| 五反庵寺 | 岡山県真庭郡 久世町大字三崎 | 335843 | | 35度 4分 8秒 | 133度 46分 10秒 | 第1次調査 1993.11.10～ 1994.02.08 第2次調査 1994.12.15～ 1995.03.23 第3次調査 1996.01.08～ 1996.03.26 | 210 300 135 | 寺域確認 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記 | 事項 | | |
| 五反庵寺 | 社寺 集落 | 弥生 | 竪穴住居 | 弥生土器 土師器 | 寺城の北端、東端及び掘り込み地蔵を検出することにより およそその寺域の範囲と一部の主要遺構の配置を促えた | | | |
| | | 白鳳・奈良 | 掘り込み地業 溝 | 瓦 鉄釘 刀子 | | | | |
| | | 中世 | 溝 | | | | | |

久世町埋蔵文化財発掘調査報告2
五 反 廃 寺

1997年3月31日 発行

編集・発行 久世町教育委員会
